

F. ヒルカーの「ドイツ体操の特質について」
『ドイツ体操』より
菅井京子¹⁾

F. Hilker's 'Vom Wesen der Deutschen Gymnastik'
Kyoko SUGAI

Abstract

At the beginning of The 20th century the "Gymnastikbewegung" arose in Europe with Germany as the center. In this movement the new Gymnastik was sought instead of the Spieß-Maul System. Franz Hilker (1881-1969) held the "Tagung für künstlerische Körperschulung" in 1922 in Berlin. In 1923 he published the "künstlerische Körperschulung" as the report on the "Tagung". Then in 1925 he established the "Deutscher Gymnastikbund", and in 1926 he wrote "Reine Gymnastik". Through the activity he connected many various schools. Finally he created the guidance record for the new "Gymnastik" by the "Deutsche Gymnastik".

The purpose of this paper is to gain clarity in order to think about the main chapter 'Das Arbeitsgebiet der Deutschen Gymnastik' in "Deutsche Gymnastik". In relation to this the translation of the preamble and the first chapter 'Vom Wesen der Deutschen Gymnastik' in "Deutsche Gymnastik" aims to provide this.

Key words : gymnastikbewegung, Deutsche gymnastik, Franz Hilker

1) 生涯スポーツ学科

訳者はしがき

20世紀の初め頃、ヨーロッパではドイツを中心に体操改革運動が起こった。この改革運動の中で、それまでのシュピース＝マウル方式の体操に代わる新しい体操が求められた。F. ヒルカー (Franz Hilker, 1881-1969) は、1922年にベルリンで「芸術的な身体修練のための会議」を開催した。1923年にその会議の報告書である『芸術的身体修練』を出版した。そして1925年には「ドイツ体操同盟 (Deutscher Gymnastikbund)」を設立し、さらに1926年に『純粹体操』を出版した。ヒルカーは、これらの活動を通して、新しい体操の諸派を強く結びつけていった。彼は1935年に『ドイツ体操 (Deutsche Gymnastik)』¹⁾を著し、新しい体操の指導要領を作り上げた。そして、この『ドイツ体操』の第2章「ドイツ体操の研究領域」は、今日まで受け継がれてきている。

本研究では、現代の体操の拠り所となっているこの第2章「ドイツ体操の研究領域」をよりよく理解するための手掛かりを得るために、その前文と第1章「ドイツ体操の特質について」の翻訳を試みた。

ドイツ体操

新しいドイツの国民国家において、国民生活や国民教育のための身体教育は、ようやくそれに相応しい注目と地位を得た。ツルネン、スポーツ、そして体操は、ひとつにまとめられてドイツ人の身体教育を担う支柱となる。このような観点から、ドイツ体操がどのような課題を実現しうるかを次に示す。

ドイツ体操の特質について

今世紀の初め以来、ドイツでは自然で合理的な人間の動きの育成を使命とするような新しい身体教育の方法が発展してきた。その課題に打ち込んだのは、初めは主に女性たちであった。しかし男性側からも、すなわち芸術

家たち、教育者たち、そして医師たちからも、通常的身體教育の改変が必要不可欠であると認識され、講演や出版において公に求められるようになった。それぞれ異なった努力が個別にあったのであるが、身体教育が精神陶冶を補完するだけのものではなく、全人的な陶冶や民族文化の基礎を築くものでなければならぬという認識において、これらの努力は一致していた。この課題は、西洋、特に北欧民族の古い時代における身体教育を担い、そして北方からヘラスへ移住したギリシア人の体操において古典的な方法で実現した。体操は、新しいドイツの民族文化を運動修練の方法によって促進しようとするような身体教育の様々な試みのための共通の名称になった。

体操は、その言葉に従えば裸体の運動を意味する。個々のギリシア諸部族では体操的修練は着衣なしで行われたということは正しい。しかし、この習慣は完全には一般的でなく、それが遵守されたところでもその行為に特別な意味があったわけではなかった。私たちは「馬の」運動が「裸体の」運動に相対しているということを知っている。後者が「裸体の」人間の力の投入や操作における彼自身の能力を形成するのに役立つ一方で、前者の馬や馬車を操縦することにおける運動や競技は、動物的な力の解放や支配における男性的な機敏さを養うということであった。昔から体操は、動きにおける人間の力の発展、調整、支配を意味していた。

この運動は、北歐＝ギリシアの古代人にとって最も重要な修練形態であり陶冶形態であった。しかし、すでにギリシア人では、総合教育としての体操から心的な力の特別な陶冶形態として音楽が、そしてさらに、体験した現実の細部まで検討することや言葉に表すという精神的な能力の発達として論理学が生まれたのを私たちは見て取ることができる。もっとも、体操は、教育の基本形態として残り、そこから他の修練法が生じるような沃土

であり続けた。この関係は、ローマの教育を経て中世において完全に逆転していく。ここでは精神的な力の育成が最も重要で、他のすべての教育的課題が下位に置かれた。精神を中心に据えて形成された中世の学校のカリキュラム、「七自由科目」のもとに特別な修練形態としての音楽もあった。しかし、体操はもはや問題にならなかった。ただ騎士道においてのみ北欧＝ゲルマンの大昔からの古い教育的関係が存続した。騎士によって求められた「7つの機敏さ」は、心的で精神的な陶冶を内に含んでいる本来の体操的修練の成果である。

しかし、騎士の教育は、数世紀の流れの中で教会的＝市民的教育法に圧されてその影響を失っていった。そして、確認可能な事態の把握や分析を目的とするような理性的な力の養成へと修練の幅はますます狭められていった。いきいきとした神秘的な出来事のための感覚、感情や直観の力は、自然科学や精神的世界の度量法の中に閉じ込められていった。そうして徐々に人間的で民族的な生を顧みないような理性の一面的な支配が生じる。18世紀の最良の精神は、差し迫った危険を回避しようと努めた。彼らは、陶冶の基礎として身体教育を強調して、人間性の理想、すなわち完全に発達した狭められていない人間の理想を、一面的な理性陶冶と対立させることによってそれを行った。無機物質の研究やその習熟において、理性の仕事が成し遂げた技術的・科学的な成果は、その支配を——一時的に抑制された後——より一層一般的に広げ、反論されないものとした。その支配は、生き物の領域にも強烈に影響を及ぼし、19世紀の末頃には身体教育にも及んだ。その身体教育は、人間の動きの損なわれていない自然な経過を感じ取る感覚には全く無頓着で、人間の動きは、止めたり、急激に変化させることによって恣意的にねじ曲げられた。内から湧き出るいきいきした力が作用する有機的な動きに代わって、内的な原動力もなく外から起こされた機械的な動きが登場した。ユリウス・

ラングベーン (Julius Langbehn) は、広く読まれた1890年のその著『教育者としてのレンブラント』において、19世紀のドイツ文化の衰退を、機械的原理が有機的原理と対立して明らかに敵対関係にあるということに帰因するものだとしている。しかし、彼が言っているように「前者は、後者にその師を見出すであらう。」

新しいドイツ体操は、運動修練において理性の一面的な優越に対して戦いを挑み、身体的＝心的＝精神的な調和、人間としての存在の全体性を回復させようとしてきた。呼吸、血液循環、知覚や感情の中に明らかになるような、人間の中でリズムカルに踊るような生命の力を感じ取る能力を呼び覚ますことによってである。その際、助けとして、その調べによってリズムカルな動きを引き出し、人間の中のリズムカルな力に呼びかけるような音楽が役立った。

リズムカルな体操の形態において、新しい身体教育は、青年や女性の間で広く共感と普及を見た。活気のあるリズムカルな動きに影響を受けて、ツルネンやスポーツでもその従来の運動法を変える試みが起こった。部分運動や素早い姿勢変化を伴うような昔の徒手体操に代わって、円滑で流れるような全身の運動を伴う身体修練が行われるようになった。ここでも音楽が補助として駆り出された。そのような体操的な運動形態は、しかし、十分に理解されていたのではなく、さまざまな誤解を伴うものであった。それゆえ、体操的な運動形態を外面的に利用することで事が片づいたわけではなかった。そして、ツルネン、スポーツ、体操の研究者たちによって激しく論争され、体操の解釈の平板化・浅薄化が起こった。というよりは、むしろツルネンやスポーツの独自性がほやけていった。しかしながら体操は一般社会においてますますその基盤を獲得していった。30年代には、体操が流行することになった。そして、さまざまな混乱が起こった。音楽について、それ自体何の

意味もなく、教育的でないものであっても、音楽を伴う徒手あるいは器械体操は「リズム体操」と呼ばれたし、音楽や音楽体操はそれがどんな種類のものでも、身体教育に適していると見なされた。そして、何の意志もなく音楽や動きの陶酔に没頭することの中に、「リズム的な」あるいは「芸術的な」身体陶冶のための前提条件を見て取るようになった。それと関連して、ダンスとダンス教育についても同様の懸念すべきことが起こった。また、スポーツ、体操、ダンス芸術の課題にも混同が起こった。この混同は、身体教育の領域に完全な紛糾状態をもたらす虞のあるものであった。

1925年に「ドイツ体操同盟」を結成した体操改革運動の推進者たちは、この虞に対処しようとした。彼らは力を合わせて、有機的な運動の特質を明らかにし、その運動形成の方法を練り上げ、大きな町や小さな町での演技発表を通して、人々の意識を変えていこうとした。理性的あるいは感情的な根拠から人間をただ可動的にするのではなく、人間の動きにおいて作用する力を発達させることと、完璧な人間の運動能力を目指したその力のコントロールのための運動感覚を発達させることが、体操の課題であるということを彼らは示した。

この課題の理解は、世間一般にできあがった「リズム的」あるいは「有機的」の解釈によって阻害され、そしてそれは今日もなお続いている。やっとな、人々は、いきいきとしていることの本質的な特徴が細かく切り刻まれないでゆれることの中に、すなわちリズムカルな動きの中に示されるということを理解するようになった。そして「有機的」とは内的な統一や目標設定から作用する力全体をいうということを理解するようになった。しかし、人々は、植物、動物、そして人間の存在の3つの領域が、全く異なる実態を示す生命の三段階を意味するという考えを考へない。植物の生命は、生長や枯死の自然の力の避け

られない拘束の中にあるが、一方動物では、その肉体的な存在の中へ、より自由で、より高次の（心的な）生の形態の力が働く。その力は、興奮、知覚能力、衝動等として現れ、そして動きや生命をリードするようなある種の選択をさせる。しかし、人間では、所与の拘束内で、その身体的=心的な生命は、生命の経過において習得する自己把握や自主決定の精神的な力によって、自由に形成される。

つまり、人間という存在は、植物あるいは動物のように単純に自然から与えられたのではなく、精神の機能としての自由と自主決定において高度に成長することを求められている。この宿命は、人間の形態にはっきりと現れている。それは、一目見て人間の形態を他のすべての生物の形態と識別させ、それらを越えて高みへ上げるものであり、しっかりと大地に立ち、上に向かって自由に成長している。そして、それは、胸郭の可動性の中に知覚の豊かさを、腕や手の自由な動きの中に行為の多様性を、そして天に向かって自由に支えもたれた頭蓋骨の膨らみの中に思考の最高の発達を示している。150年以上も前に、他でもないゲーテは印象深い言葉で人間のその形態に気づかせた。1775年の「骨相学の未完草稿」の中で、彼は書いている。「天が映し出されるという丸天井の支えとしての全体の形態のように！その中で永遠の天球の純粋な像が巡りうるような、そんな天と同じように、私たちの頭蓋骨が私たちの上にアーチをなしている！…動物の構造はそうではない！」また、ヘルダーは、彼の『人類史哲学の理念』の第4編の中で、人間の形態の直立性を、人間形成（人間性）の本質を約束するような人間のすべての能力を象徴するものと見なし、そして、それは、教育によって発達させることができるとした。「自然のすべての外形は、その内的価値を表したものである。」と彼は始める。「つまり、天に向かう視線、おお人間よ、身震いして自分の計り知れない特権を受け取り、楽しめ！その特権は、世界の創造

主が、ひとつの単純な原理、すなわち直立の形態に結びつけたものである。君が獣のように身をかがめて歩くならば、君のより高い精神力が宿る頭は、むさぼり食う口や鼻と同じ高さに形成されていたであろう。そして、それに次いで君の骨格が整えられ、神の意図は君の中に沈められて見えなくなってしまっていたのではないだろうか？」直立歩行によって、人間は芸術的造物となった。人間は、芸術工具としての手と、脳には感性が与えられており、人間の構造にのみ根ざした言葉という神の贈り物によって動かされる。「話すための構造とともに、人間は、神の息吹と理性の種子、そして永遠により完全なものになることを受け取り、この世を満ちす創造的な神の息吹の余韻、崇高な観念芸術、すなわちあらゆる芸術の母を迎え入れた。」このより高い精神の発達と同時に人間は本能の確かさと衝動の旺盛さを失ったと、人々はおそらく主張するであろう。しかし、それに対して、ヘルダーは確言する。「人間は、この世の動物が持っているすべての本能を持っている。ただ彼は、それらをすべて彼の構造に従って、彼の状況に合わせて和らげてきた。」神経や感覚の支配のもとに、それらを従属させることによってである。人間は、理性を与えられた造物として、自分の存在の意味を問う、すなわち認識し、そしてそれに応じて彼の輪郭を作る。そのような能力を持っている。「自然から初めて解放された人」として、彼は生まれつき何も持たず、常に道を誤ったり、躓いたりする危険の中で、すべてを学ばねばならない。「このように彼は、転ぶことによるのみ歩くことを学び、そしてしばしば間違うことによるのみ真実に至る。一方、動物は、内に抑えつけられていない彼の感覚と衝動に導かれて、四足歩行でしっかりと進む。人間は、頭を高く直立して遠くを見渡す王の特権を持っている。もっとも、それだから、多くの暗い、誤ったものを見る。それどころか、しばしば自分のステップをうっ

かり忘れることさえあり、そして倒れて初めて、どんなに狭い土台の上に、彼の考えや判断を宿している頭や心の構築物が載っているのかを思い出す。一方で、彼は、高い理性の使命に従って、この世に他にはない造物になり、そしてそうあり続ける。神の子、この世の王として。」

自己決定という王の特権に結びつけられた学習の義務は、特に、人間の動きの発達の際に課せられる。人間の動きは、直立形態からのみ——他の生物の他の形態や運動形態からでなく、——その法則や使命を展開することができる。子どもは、その人生で初めて両足で立ち上がる時、全力を注いで直立であることを習得する。そして、その姿には、全体でひとつの損なわれていない自然な作用が働いている。(図1を見よ。)直立姿勢における動きの自由さの獲得のために、しかし、子どもは、本来の子ども時代の全期間(1歳から7歳)をかけて、その動きの練習をする。この動きの練習において、彼は、文字通りの意味で、自分の力と世界の物事を経験する。6歳の子どもの形態には、図2のように、全体のまとまった構造と同時に、成長する精神的生命の印として、地面に結びついた安定性から首と頭が解放されていることも明らかになる。しかしながら、完全な運動能力の獲得に伴って、それ以前にもすでに素質や外的な影響で損なわれうるのであるが、人間発達の達成についての自信がしばしば薄れ始める。特に、自由に起こり展開されるような身体的、心的、精神的な力の相互作用を、内的あるいは外的な理由で促進させないだけでなく、それを止まらせる、あるいは全く抑えつけるような時にはそうである。ここに体操的教育の課題がある。それは、人間の本質の認識の上に基礎づけられた動きの修練によって、人間の発達を確かなものにし、完結させる、あるいは回復させることである。それについて、教育者たち、あるいは1927年の『純粹体操』の代表者たちは、研究のはじめに次の文章を

掲げる。「体操の授業を受けることは、形成的な活動を行い、人間的発達に責任を持つことである。」

この文章では、最終的な説明がまだ述べられていない。それを求めて、ドイツ体操は、初めから激しい論争の中で努力してきた。この論争は、ドイツ的でない運動形態の流布や普及に対して向けられていた。その運動形態とは、異国の運動文化から受け継がれたか、あるいは純粹に理性的で、普遍的に妥当な身体修練を得ようと努めることに由来するものである。しかし、人間や民族の差違は、普通、それが動きの中に現れるように直接的に、あるいは印象深くは現れない。フランス人、イタリア人、あるいはスラブ人に対して、ドイツ人の静かで控えめな、しかしはっきりとした動き方は、その特徴を示す。動き方は、その民族性の身体的=心的=精神的な特徴の表現である。この動き方において、ドイツ人は、昔からその生命を営み、その戦いを導いてきた。そして、行進やダンスを形づくり、身体的な運動を行ってきた。もし、体操がドイツ人の特質を理解し、それを実現しようとするのであれば、ドイツ人の運動感覚や運動能力を発達させなければならない。体操の努力は、数年もの長い間、ドイツ民族に適した運動修練の承認と定着を巡る議論に向けられた。初めて、ドイツに起こった大変革、そしてそれによって促された体操諸派の統合、すなわちドイツ帝国体育・スポーツ・体操教師連盟への統合は、目標をしっかり見定めた指導のもとで、ドイツ体操の課題を明らかにし、それを必修にすることを可能にした。30年間の研究において体操的運動の先駆者たちが見出し、試みたものが、ドイツ体操にひとつにまとめられた。次の言葉とともに、それは公にされた。ドイツ体操は、ドイツ人の運動感覚と運動能力の発達と修練の課題である。

訳者あとがき

F. ヒルカーは、1925年に「ドイツ体操同盟 (Deutscher Gymnastikbund)」を設立し、この同盟の活動を通して、新しい体操の諸派を強く結びつけていった。このドイツ体操同盟は、ナチス (国民社会主義) の政府によって1933年に解散させられ、また他の多くの体育・スポーツの組織も解散させられて強制的にひとつの新しい団体、「ドイツ帝国体育・スポーツ・体操教師連盟 (Reichsverband Deutscher Turn-, Sport- und Gymnastiklehrer e.V.)」に統合された。ヒルカーは、その連盟で自発的に体操部門の事務長として働いている。後に彼は、「体操は、『千年王国』の難しい時代に、私を没落から守った救命ボートになった。」²⁾と、この当時のことを回想している。そのような状況の中で、ヒルカーは1935年に彼の体操研究の集大成である『ドイツ体操』を著した。その出版に当たりナチス党の体育担当官の許可を得なければならなかったが、冊子の初めの部分に「新しいドイツの国民国家において、…」という文章を加えることによって、新刊の許可を得たと、彼は自ら語っている³⁾。これが、今回翻訳した前文である。前文だけでなく、『ドイツ体操』全体に、今日ではナチ用語として辞書で解説されているような単語も散見している。例えば、völkisch (民族主義的な)、Volksgemeinschaft (民族共同体)、Volksgenosse (民族同胞) 等である。時代背景をはっきりと見て取ることができる。今回翻訳した「ドイツ体操の特質について」では、特に「ドイツ人」ということが強調されており、ヒトラー政権下で出版をするための配慮も加わったものかとも考えられる。確かに、「ドイツ人」が強調されているのではあるが、注意深く読んでいくと、その底に流れているのは人間に普遍的なテーマであることがわかる。この「ドイツ体操の特質について」は、後に続く「ドイツ体操の研究領域」の章をよりよく理解するために大変重

要な章であると思われる。

注

- 1) Hilker, F., Deutsche Gymnastik, Bibliographisches Institut: Leipzig, 1935.
- 2) Radde, G., Aus dem Leben und Wirken des entschiedenen Schulreformers Franz Hilker (1881-1969), In: Peter Drewek (Hrsg.): Ambivalenzen der Pädagogik. Zur Bildungsgeschichte der Aufklärung und des 20. Jahrhunderts. Harald Scholtz zum 65. Geburtstag, Deutscher Studienverlag: Weinheim, 1995, S.155.
- 3) Radde, G., a.a.O., S.164.

